江津市庁舎の設計にみる第一期吉阪研究室の特質
—同時期における他の二作品との比較を通して—

2015.11.09
中谷研究室＜吉阪隆正＞研究ゼミ
1X11A081-3 諏佐遙也

吉阪隆正	設計	吉阪研究室	U 研究室
江津市庁舎	エスキス	浦邸	ヴェニス・ビエンナーレ日本館

【序論】

研究目的

これまでの吉阪隆正[1]に関する研究は、吉阪の思想を扱ったものが多く、設計時のようすも研究室内での描写を扱ったものがほとんどで、施主や施工者とのやり取りは明らかになっていない点が多い。

本研究では U 研究室の初期作品である江津市庁舎[2](1959) を扱い、設計者—施工者—施主のやり取りを図面、手紙、言説等の資料を読み解くことで、作品の設計過程を明らかにする。

また、同時期・同メンバーにおける他の作品として、日本国政府（外務省）が施主であったヴェニス・ビエンナーレ日本館[3]が挙げられる。これにも設計変更のようすがわかる資料が現存しており[4]、江津市庁舎の設計過程との比較を行いたい。

さらに、浦邸[5]をはじめとした同時期の U 研究室の初期作品とも比較・考察をすることで、第一期吉阪研究室を定義するとともに、初期 U 研究室の特質を見出す。

研究方法・論文構成

本研究では江津市庁舎の設計過程を、新出の吉阪研究室と江津市とのやり取りの手紙資料[6]計 65 通を用いて既刊の雑誌における吉阪の言説の詳細を明らかにし、市庁舎建設の全貌をみる。

また、同じく第一期における設計作品であるヴェニス・ビエンナーレ日本館と浦邸に関する現存資料 (エスキス図面・日記・手紙) の内容と性質に触れることで、第一期吉阪研究室の特質を見出す。

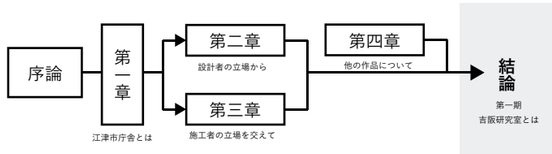

fig.1 論文構成ダイアグラム

既往研究と本論の位置づけ

●江津市庁舎に関するもの

・吉川潤 , 近藤正夫「江津市庁舎の P.S 造構造強度の審査について」[7]

・中島儀八「江津市庁舎 A 棟の構造について」[8]

いずれも、P.C[9] を建築に用いた事例として市庁舎 A 棟の構造を評価する論文であり、江津市庁舎の設計についての研究はない。

●ヴェニス・ビエンナーレ日本館に関するもの

・吉阪隆正『建築学大系 39 鉄筋コンクリート造設計例』[10]

吉阪による工事中の詳細な日記が掲載されている。本論ではこの日記とエスキス図面を併用し、江津市庁舎の設計との比較を行う。

● U 研究室に関するもの

・斉藤祐子『吉阪隆正の方法』[11]

吉阪研究室が 1954 ～ 1955 年にかけて設計した、浦邸についての設計プロセスを研究している。本論では設計の追い方を参考にした。

【本論】

第一章　江津市庁舎とその時代

本章では、江津市および江津市庁舎の客観的情報をまとめる。

昭和 29 年、町村合併によって誕生した島根県・江津市[12]は、発足にあたってたてられた「新市建設計画」で新庁舎を建設することを決定する。前年の昭和 28 年 10 月、「昭和の大合併」[13]として知られる町村合併促進法が施行され、相当数の新庁舎・公共建築が建設された。[14]それまで権力の象徴とされた庁舎の建築が、民主主義のための建築に取って代わる時代であった。

fig.2 江津市庁舎外観

江津市庁舎		着工	1961 年 (S36)3 月 10 日
設計	吉阪研究室	竣工	1962 年 (S37)3 月 15 日
施工	同上及江津市建築課	(設計期間 1959 ～ 1961 年)	
構造	蛭田研究室 (R.C. 部分)		
	神山研究室 (P.S. 部分)	敷地面積	10,560,000㎡
設備	井上研究室	建築面積	1,685,698㎡
施工	多田建設株式会社 (一般部)	延面積	4,122,831㎡
	別子建設株式会社 (P.C 部)		

第二章　設計者の立場から

本章では、江津市庁舎の設計までの U 研究室のようすと成り立ちに触れ、吉阪がどのような理想をもって市庁舎の設計に望み、設計を進めていたのか雑誌への投稿文やメモから明らかにした。

■ 1960 年ごろの U 研究室

1954 年、U 研究室の前身となる、吉阪研究室という集まりが芽生えた。吉阪隆正、大竹十一[15]、松崎義徳[16]、城内哲彦[17]、滝沢健児[18]らおもに五人からなる第一期の吉阪研究室は、個人住宅や学校建築の設計を主としていた[19]。ヴェニス・ビエンナーレ日本館の竣工から 3 年、吉阪研究室は初めての取り組みとなる市庁舎建築の設計に取り組む。

fig.3 吉阪研究室でのポートレート

■雑誌における言説からみる構想

吉阪による、市庁舎建築のあるべき姿についての言説をまとめた。吉阪は西欧の市庁舎建築について、**「町全体のヘソを形成するものであり、自分らの自由を獲得してきた歴史的な記録」**[20]と述べる。日本においては、大部分の市が行政区画の単純化のための町村合併によるものが多いと嘆きながら、市庁舎は**市民のためのものであることが第一でなければならない**[21]。とした。

■雑誌における言説からみる設計過程

市当局からの要求や、地形その他自然環境を考慮し、市街の景観を考えた吉阪の案は比較的早くにまとまった。事務能率や広場の景観・敷地条件からして、ピロティを持つ A 棟と、台地に続く B 棟とに分けられた。橋状の形態から土木技術であった P.C の構法を用いて設計し、市民広場も延床面積に含めることで、建築費として計上して市民に還元することになった。

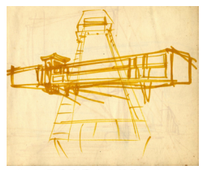

fig.4 江津市庁舎の初期スケッチ

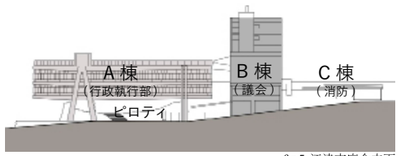

fig.5 江津市庁舎立面

第三章　施工者の立場を交えて

本章では、施工者である江津市建築課・坂根氏と吉阪研究室との手紙のやり取りと図面の変遷を追うことで、市庁舎の構造計画と形態が大きく変更された点についての詳細をみる。

■江津市建築課 坂根正夫氏

市庁舎の設計にあたり、施主である江津市役所における担当者に坂根正夫氏がいた。設計当時は江津市建築課建築係長として吉阪研究室や施工業者との渉外、設計にあたった。

fig.6 坂根正夫氏近影

■エスキス図面にみる平面計画の変遷

設計期間における平面を時系列順に並べて、変更個所を抜粋した。設計を始めた段階 (1959 年 11 月) から最終的な平面 (1961 年月) に至るまで、平面は大きく変更されることなく計画された。大分すると台地の上の塔屋部分と、そこからのびる橋状の A 棟である。

fig.7 から fig.8 にかけては平面が分棟し、fig.8 から fig.9 にかけては棟が増えるとともに、最終的平面として設計が完了する。しかし、fig.9 から fig.10 にかけ、棟を支えるであろう柱が平面に出現する。これがすなわち、Λ型のサポート柱である。

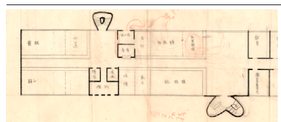

fig.7 1959 年中頃の平面

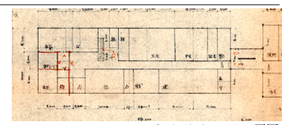

fig.8 1959.11.11 の平面

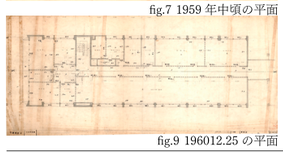

fig.9 196012.25 の平面

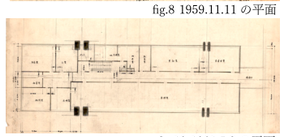

fig.10 1961.5.2 の平面

■手紙からみる構造の変更と形態

前節における変更の時期の手紙のやり取りを読み解くことにより、雑誌の言説においては曖昧だったその詳細をあきらかにした。

設計を開始してから、一年間のあいだ構造の解決法が見えなかった A 棟に、P.C 鋼材に鋼棒を使用した、本来は土木技術である P.C 構法を用いることを考案する。

しかし、この構法は特定の業者でしか施工できず、工費が高く安定感が不足しているとの市側の不満を誘発する。坂根氏が吉阪の理想を議会に伝えながら、現在の低廉なΛ型の柱に帰着した。「市民のための広場をもつ市庁舎」は**夢からは痩せてしまった姿**[22]になったが、ピロティ空間は吉阪と坂根氏の市議会への働きかけによる成果であるといえる。

【考察】

第四章　第一期吉阪研究室の設計と特質

本章では、浦邸、ヴェニス・ビエンナーレ日本館の設計過程におけるエスキス図面と吉阪の言説を比較し、江津市庁舎の設計過程との関連を探る。また、同時代の他の設計作品についても比較・分析することで、初期の U 研究室、すなわち第一期吉阪研究室の特質を見出す。

■浦邸の設計

浦邸の設計においては、浦氏から建築全体の構想が吉阪・大竹らに任され、細部の検討を行う際には施主を交えて打合せを行う、という手法が用いられた。部屋位置、家具位置、構造・設備・仕上げ等の検討について手紙でのやり取りを交わしながら、計 3 回の打合せののち、最終案が決定した。

■ヴェニス・ビエンナーレ日本館の設計

敷地条件を踏まえた設計、展示する作品のための採光を考えた設計を進めながら委員会と打合せを重ねるが、フォルムが日本的でないと批判を受ける。表現を変えて「日本的な」案を二案提出するもまとまらず、委員会から敷地に赴きすぐに発注するよう指示を受ける。現地に赴く途中で思いついたアイディアが最終案に発展した。

■その他の主な設計

第一期 U 研究室の他の作品—アテネ・フランセ[23]、呉羽中学校[24]—は、幾期にわたる増改築工事を経て計画された。手紙資料は未確認であるが、施主とのやり取りが多く行われたことを示すものではないか。

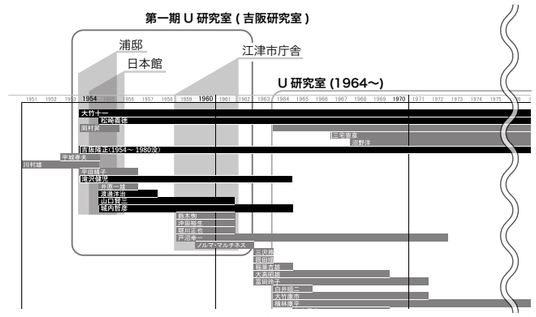

fig.11 第一期 U 研究室中の 3 プロジェクトとメンバーの変遷

【結論】

第一期 U 研究室メンバーによる U 研初期作品のうち、両端の時期にある浦邸、ヴェニス・ビエンナーレ日本館と江津市庁舎の設計過程を追うことで、その特徴を明らかにした。

エスキス過程の図面や手紙が多く残る初期作品は施主とのやり取りが豊富である証拠であり、吉阪らの理想とする建築が施主との折衝を経ながら成立していくさまを示している。U 研究室の設計手法は、このような第一期吉阪研究室の特質を基礎としてはじまったものである。

■註釈 1. 建築家。1917-1980。2. 江津市庁舎 (1962)。吉阪研究室設計による、島根県江津市の市庁舎。3. ヴェニス・ビエンナーレ日本館 (1956)。吉阪研究室による、イタリアのヴェネチア・ビエンナーレ (伊 :biennale di venezia) における日本のパヴィリオン。4. 文化庁の委託事業として、早稲田大学が実施した平成 26 年度《近現代建築資料 (建築家「吉阪隆正」) の調査概要》の成果による。5. 吉阪がフランスで留学生として過ごしている間に出会った数学者・浦太郎にのために設計した住宅建築。6. 島根県江津市役所において保管されていた、江津市庁舎設計時における青焼・手紙等一連の資料。平成 25 ～ 26 年度にかけて行われた、市庁舎の耐久、耐震性能調査に伴った整理された。7. 吉川 潤 , 近藤正夫「江津市庁舎の P. S 造構造強度の審査について」日本建築學會研究報告 (57), 318-323, 1961 8. 中島 儀八「江津市庁舎 A 棟の構造について」日本建築學會研究報告 (57), 314-317, 1961 9. プレストレストコンクリート (Prestressed Concrete) の略。10. 吉阪隆正『建築学大系 39 鉄筋コンクリート造設計例』(彰国社 , 1959(改訂増補 , 1976)) 11. 斉藤祐子『吉阪隆正の方法 浦邸 1956(住まい学体系)』(住まいの図書館出版局 , 1994) 12. 江津市（ごうつし）は、島根県西部の石見地方に類される、日本海に面した市である。13.1953 年から 1961 年にかけて進められた市町村の合併のこと。1953 年に施行された町村合併促進法や、同年に閣議決定された町村合併促進基本計画、さらに 1956 年に施行された新市町村建設促進法により、全国的に市町村の合併が促進された。これらによりおよそ 1 万あった市町村数はおよそ 3,400 にまで減り、約 1/3 となった。14.1953 ～ 1963 の 10 年間において全国で建設された庁舎建築は、およそ 140 にのぼる。15. 建築家。1921-2005。1945 年早稲田大学理工学部卒業後、佐藤聯合設計事務所、梓建築事務所勤務の後、1954 年に吉阪研究室設立。生涯、吉阪のパートナーであり続けた。16. 建築家。1931-2002。1959 年早稲田大学大学院修了。1993 年から象設計集団。17. 建築家。1928-。1957 年早稲田大学大学院修了。1962 年に間組 (現・株式会社安藤・間) 入社。18. 建築家。1927-2013。吉阪研究室設立を経て、1964 年まで在籍。19. 吉阪研究室が 1960 年までに設計した建物は、個人住宅 11 件、学校建築 5 件、工場 3 件、美術館・文化施設 2 件である。20.,21. 吉阪隆正『新建築 37 6』(新建築社、1962) より。22. 江津市『ごうつ』より。「回転体の腹のふくらみを持った曲面はいまだに目に残り、平行な梁だけの床は少し私たちの描いていた空間の夢からは痩せてしまったが、よい経験であった。」23.U 研究室が設計した、フランス語学学校の校舎。1962 年 4 月竣工。1975 年まで、7 期にわたって増築がなされた。23. 富山市立呉羽中学校。1959 年月竣工。2 期にわたって計画された。■図版出典 fig.1,5,11 筆者作成 fig.2 筆者撮影 fig.3,4 吉阪正邦邸私蔵資料より fig.6 中谷研究室＜吉阪隆正＞研究ゼミ撮影 (2015.8) fig.7,8,9,10, 文化庁国立近現代建築資料館蔵

目次構成

論文編

I　序論

第一節 . 研究背景
第二節 . 研究の目的と方法
0-2-1. 研究の目的
0-2-2. 研究方法
第三節 . 既往研究と本論の位置づけ
0-3-1. 吉阪隆正・U 研究室に関するもの
0-3-2. 江津市庁舎に関するもの
0-3-3. ヴェニス・ビエンナーレ日本館に関するもの
0-3-4. 本論の位置づけ
第四節 . 用語の解説と定義
0-4-1. プレストレストコンクリート

II　本論

第一章　江津市庁舎とその時代
第一節 . はじめに
第二節 . 江津市について
1-2-1. 江津市の概要と沿革
1-2-2. 新市庁舎建設
第三節 . 江津市庁舎について
1-3-1. 建築概要
1-3-2. 建設までの略年譜
第四節 . 小結

第二章　設計者の立場から
第一節 . はじめに
第二節 .1960 年ごろの U 研究室
2-2-1. 第一期メンバー
2-2-2. 浦邸
2-2-3. ヴェニス・ビエンナーレ日本館
2-2-4. 初めての公共建築
第三節 . 雑誌における言説からみる構想
2-3-1. 西欧的な市庁舎と市民意識
第四節 . 雑誌における言説からみる設計過程
2-4-1. 敷地条件と棟の構造
2-4-2. 曲面天井のピロティ
2-4-3. 神山研究室と P.C
2-4-4. 広場に充てる建設費
2-4-5. 江津の瓦屋根と市庁舎
第五節 . 小結

第三章　施工者の立場を交えて
第一節 . はじめに
第二節 . 江津市建築課 坂根正夫氏
第三節 . エスキス図面にみる平面計画の変遷
3-3-1.1960 年までの平面の変遷
3-3-2.1960 年以降の平面の変遷
第四節 . 手紙からみる構造の変更と形態
3-4-1.P.C の利用に至るまで
3-4-2. 鋼棒使用の P.C
3-4-3. 安定感の要求
3-4-4. ∧型のサポート
第五節 . 小結

III　考察

第四章　第一期吉阪研究室の作品と特質
第一節 . はじめに
第二節 . 第一期メンバーの移り変り
第三節 . 浦邸の設計
4-3-1. 大竹のプランと吉阪のエスキス
4-3-2. 第一回打合せと部屋の位置
4-3-3. 第二回打合せと家具の位置
4-3-4. 第三回打合せと構造、設備の検討
4-3-5. 最終案
第四節 . ヴェニス・ビエンナーレ日本館の設計
4-4-1. 最初期案ー予算試算のための設計
4-4-2. 設計条件から
4-4-3. 曲面天井の倉―もっと<日本的なもの>を
4-4-5. ジャポニカ案
4-4-6. 最終案
第五節 . その他の主な設計
4-5-1. ヴィラ・クゥクゥ
4-5-2. 呉羽中学校
4-5-3. アテネ・フランセ
第六節 . 初期作品の共通点からみる第一期吉阪研究室の特質
4-6-1. 施主とのやり取りと手紙
4-6-2. 基本計画とエスキス図面
第七節 . 小結

IV　結論及び謝辞

資料編

1. 江津市保管の資料
1-1. 手紙書き起こしの方法とリスト
1-2. 手紙

2. 坂根正夫氏へのヒアリング筆記

3. 国立近現代建築資料館保管の資料
3-1. インデキシングリスト
3-1-1. リスト作成の方法
3-1-2. リスト
3-2. 江津市庁舎に関する図面 273 点